
まえがき

山口大学の「学生生活実態調査」は、1954年（昭和29年）に始まり、以後3年或いは5年毎に実施され、報告書を作成してきた。以来、約60年の間に合計17回の報告書を数えることになった。この長年にわたる山口大学生の実態調査の結果として、実に様々な学生の態様が浮き彫りにされてきた。

今回作成した報告書は以前と異なる点がある。昨今における情報公開或いは情報共有の潮流に乗る格好で、調査結果の一部を山口大学ホームページ上に公開したことである。敢えて言えば世界中の人々が閲覧できることとなり、山口大学で学ぶ学生像の実態がオープンにされることである。換言すれば、学生という生身の人間が学び、育ち、時には苦しみながら、大学という空間で懸命に自らの力を研いでいる現実を発信できることになった。この結果、山口大学生が置かれた教育環境の特徴を広くアピールすることができると思う。

例えば、近隣の国立大学に比べて、大学周辺のアパート代は低価格に設定され（Q3）、経済的支援者の負担軽減に役立っていること（Q8）など、利便性の優位さが明らかにされている。また、いくつかの質問項目への回答からは、落ち着いた静かなキャンパスで勉学に課外活動に勤しむ山大生の実情をも窺い知れる。こうした教育環境は山口大学の誇りである。調査結果を踏まえつつ、さらに環境整備の充実に努めたい。そのことを受験生となる高校生や保護者の方々に是非知って頂きたいと思う。

こうした一方で、実態調査から浮き彫りされた課題も決して少なくはない。私たち山口大学教職員は、このことに正面から向き合う必要がある。例えば、一日の勉強時間が少なく（Q47）、殆ど読書の時間を確保していない学生も多数いる（Q51）。「活字離れ」と言われて久しいが、極めて残念な統計結果である。ネット環境の充実により情報収集が便利になったこともあるが、人間力養成の基本である読書が等閑にされている。こうした課題を本調査から十分に読み取り、今後の学生指導に大学教職員は大いに役立てて欲しい。

最後になってしまったが、本報告書の調査を担われた調査委員会及び関係者の方々に心より御礼申し上げたい。この労苦に報いるためにも、報告書が大学の基本である教育環境の充実と学生指導の質向上に、大いに活用されることを望みたい。

平成28年3月

山口大学副学長（教育学生担当）

瀧 厚

